

SMFアートの縁結び @IRUMA

大田楽&創作ダンスユニット「転々」ワークショップ

2009年11月1日 東野高等学校/入間市博物館(アリット)

前年度(2008年)の《アート竜巻フェスタ @IRUMA》では、入間市博物館庭での〈風車〉のインスタレーションと〈創作ダンス〉、〈パスカメラ〉の巡行、〈大田楽〉のデモンストレーションが行われました。今回は、それらを含む県内各地での昨年の事業報告と共に、この入間を皮切りに行われる今年度の事業《SMFアートのわっ!》の告知をする「SMFアートキャラバンコーナー」を博物館内に設置して、同時開催の「まなびピア埼玉2009 in 入間」の来場者にアピールすることができました。入間市博物館では2009年7月に〈パスカメラ〉の三友周太さんや県立近代美術館の学芸員を招いて子どもたちのためのワークショップが開かれており、アートの縁は次々とつながっています。

今回の〈創作ダンス〉と〈大田楽〉は、「まなびピア」のメイン会場である隣接の東野高等学校で行われ、市内外からの多くの来場者を楽しませました。クリストファー・アレグザンダーが設計した東野高等学校は約65,000㎡の広大な敷地に、木造の大講堂や体育館、回廊でつながる2階建ての教室群の白と黒の漆喰の壁が池に映え、2,000本以上の木々が校舎を取り囲み、「東野村」を形作っています。西洋のような、いやかつての日本のような不思議な懐かしさがかもし出すこれらの美しい建物は、そこに人が動くことで初めて息づくようです。日本の伝統芸能をふまえた〈大田楽〉、さまざまな文化を吸い込んだ現代の〈創作ダンス〉、この対照的な身体の動きが東野の建築とコラボレートすることは前年度からの夢だったのです。

大田楽ワークショップ

〈大田楽〉とは、中世の幻の芸能である田楽を故野村万之丞(1959-2004)がさまざまな考証を



を経て現代に甦らせた楽劇です。風のように現れ、風のように去っていく田楽法師たちにいざなわれての、しばしの中世への旅。太鼓、笛、ささら、チャップという簡素な楽器が生み出す驚くべき躍動感に、日本人はかつてもっと解放され、自由だったのではないだろうかという思いをめぐらすひと時です。色鮮やかな衣裳にはあらためて、われわれの文化が朝鮮半島の向こうから絹の道を経巡ってきたものが残っているのを知ります。しかし、この芸能(大田楽)はあくまでも創作なのです。綿密に作りこまれた構成ゆえに、どのような場所で演じられても違和感はありません。

池にかかる太鼓橋にならんだ老若男女50名余りの田楽法師。そして、その後をついていく人々は300人を超えていました。

(山尾聖子/SMF運営委員)



プログラムリーダー:山尾麻耶

阿南育子、碓谷海景、池谷好弘、上杉文子、江村博幸、岡田朱美、粕谷辰吾、加藤祥代、加藤隆汰、神山雄大、加藤あや子、神田千鶴、栗村仁美、小島愛子、児玉后子、小峰博生、小室苗子、桜木昭一、鈴木明日香、高岡結友、高野紗代、高野莉緒、月居茂、中屋愛美、中得一美、野仲啓子、橋本由紀子、蓮見愛、廣澤浩一、府川日菜、前田良郎、町田恵梨、町田龍海、松田千彩、松田晴美、山本美晴、雪山智子、渡辺奈苗、渡辺ゆい、ほかNPO法人ACT.JTのみなさん



創作ダンスユニット「転々」ワークショップ

2009年11月1日の少し肌寒さを感じる秋晴れの早朝、豊かな緑と美しい校舎をもつ東野高等学校を舞台に、ダンスユニット「転々」による〈創作ダンス〉のパフォーマンスの撮影が行われました。日常の空間を瞬時に異次元空間にしてしまう「転々」のダンサーたち、ゆるる水面、鳥のさえずり、子どもの声、まさに一期一会のアートシーンを、映画「マリオネット」(古波津陽監督。2008年作品)の撮影で東野高等学校の魅力を知り尽くしている辻健司さんが映像として記録しました。

校内にある池の辺りでは水面にダンスを映しながらの「川の中」という作品を、芝生では風や光を感じながら演じる「柔らかな光」と「今日の風」を、回廊では柱を巧みに利用して演じる「石塔のなく時期」を、また中世のヨーロッパを想わせる多目的ホールでは「英雄」「変身(カフカ原作)」というスティックな作品を、ヨーロッパの路地に紛れ込



んだようなスペースではユーモアあふれる日々の営みを描いた「小象の行進」という作品を、それぞれ上演しました。

後に記録フィルムを見てみると、東野高等学校の美しい緑と特殊な建造物から発せられるメッセージがダンスから放出されるメッセージと絡み合い、融合し、さらに撮影者の目による抽出が加えられて、明確なメッセージ性を持つダンス映像になっていました。今回の企画によって、上演の「場」を開拓していくことや映像と関わることの重要性に気づかせていただきました。

撮影後には、「転々」メンバーによるワークショップ「野外ダンスパフォーマンスを楽しもう!」が行われました。参加して下さった方々は、楽しい小品を隣りにマスターした後、おのおのが校内を探索して表現に適した場所を見つけ、照れることなく野外ダンスパフォーマンスを楽しまれました。

(藤井香/SMF運営委員)



画像をクリックしてどんな音か聞きください

SMFアートの縁結び @KITAURAWA

音モニタージュワークショップ

2009年11月8日 埼玉県立近代美術館 3階講座室

2008年はフランスの作曲家ピエール・シェフェール(1910-1995)が世界で初めてのミュージックコンクレート(具体音楽)を作った60年目の節目となる年でした。そして2010年は彼の生誕100年にあたる年でもあります。そんな狭間の2009年11月8日、美術館としてはめずらしい〈音モニタージュワークショップ〉が、一般の参加者と学生ボランティアによって実施されました。ミュージックコンクレートの制作手法に倣い、日常的な物品などから物音をマイクで録音し、それらをコンピュータによって切り貼りする手法で音楽を作り出す体験プログラムなのですが、音楽に関する専門的な技

術や知識がなくても、誰もが音楽を作る楽しさを実感できるものになっています。

私たちの日常にあふれかえる物音を注意深く聴取して、その音に自らが「音楽的である」という意味合いを与えるときに、その物音は「音楽的なもの」と生まれ変わります。その体験は、「音楽であるもの」と「音楽ではないもの」とを無意識に区別してしまっている私たちの既成の価値観を根本から見直し、新たな表現や創造に向かう感性の大きな拡張につながるといえるでしょう。

(柴山拓郎/SMF運営委員)

